

No. 11

2024/9/12

小野友道の

お節介な戯言

サルバルサンが間に合わなかった
梅毒に罹った有名人

『王様も文豪も苦しんだ性病の世界史』（ビルギット・アダム（瀬野文教訳）、草思社、2003）という本がある。梅毒に罹った有名人を挙げている。ボードレール、ベートーベン、デュラー、ゴッガン、ハイネ、モネ、モーパッサン、ミルトン、ニーチェ、ショウペンハウエル、シューベルト、スメタナ、スウィフト、ロートレック、オスカー・ワイルドなど聞き覚えのある芸術家の名がまだまだ続くがもう疲れてしまう。18、9世紀梅毒はこのように蔓延っていた。日本でも例外ではなかった。当時は梅毒の原因も不明で、治療は怪しいも薬とも呼べない代物ばかりの時代である。しかし、20世紀に入ったばかりの1905年、シャウディンとホフマンの二人が梅毒の原因微生物Treponema pallidum（トレポネーマ・パリズム）を先天梅毒児の肝臓から見つけ出した。そして1909年、ドイツのエールリッヒの下で秦佐八郎がヒ素化合物を幾つも幾つも梅毒に対する効果を試し、ついに606番目の試験薬、それは科学者ベルトハイマムが合成した有機ヒ素化合物が有効であることを発見した。Salvarsan(サルバルサン)の名で登録商標された。salvator(救世主)とarsenic(ヒ素)を組み合わせた造語で、その期待の大きさがうかがえる。「魔法の弾丸」とも呼ばれた。私が医者になりたての頃、患者の中に昔606号を打ちましたという患者たちがいた。「606号男の勲章」などと男たちが空威張りしていたころの話である。秦佐八郎は現在の島根県浜田市出身で、北里柴三郎の弟子でペストの研究などしていたが、その能力を買われてドイツ留学を果たしたのである。

そのサルバルサンもヒ素が発がん性を有していることが判明し、梅毒の治療は現在もつばらペニシリン系抗生剤にとってかわられた。しかし、前号で述べたように梅毒は今また猖獗を極めている。性行為など本能に基づいた行動が感染機会になるという業病である。しかし、意志さえあれば予防できる感染症である。賢明な諸氏には縁のない話で申し訳ないが、それでもくれぐれもご用心を！